様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ９ 月　 ３ 日現在

機関番号：３３９３６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７８０４０４

研究課題名（和文）小学生から高校生までの不適応プロセス研究：多次元的アセスメント開発と予防的介入

研究課題名（英文）A Study of the Maladjustment Process in Elementary to High School Students: Development of a Multidimensional Assessment Tool and Preventive Intervention Program

研究代表者
鈴木　美樹江（Suzuki, Mikie）

人間環境大学・人間環境学部・講師

研究者番号：２０５３６０８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では小学生から高校生を対象とした不適応プロセスに関するアセスメント研究及び介入法について以下の成果が得られた。
①本研究で開発した不適応感尺度を用いて横断的及び縦断的見地より学年差の検証を行い，不適応要因・徴候が小学5年生から6年生間で有意に低下し，高校生は1年生から2年生にかけて不適応徴候得点が有意に上昇していた。②S-HTP研究では木の描画面積は別室登校を希望する不登校傾向，人の描画面積は遊び・非行に関連する不登校傾向と負の相関が見られた。③SCT研究では学校不適応高群と低群とでSC・教師等にイメージの差異が見られた。最後に上記のアセスメントを用いた心理的援助方法の検討を行った。

研究成果の概要（英文）：In this study, the following results were obtained on the assessment of and intervention for the maladaptive process in elementary to high school students. The maladjustment process scale developed in this study revealed longitudinal grade differences. Maladaptive factors/signs decreased significantly from the fifth to the sixth grade of elementary school, but they increased significantly from first to the second grade of high school. The S-HTP study revealed that the expression area devoted to trees and the person were significantly negatively correlated with the tendency to choose “to stay outside regular classrooms” and “to engage in delinquent activities,” respectively. The SCT study showed differences in the image of school counselors and teachers between groups showing high and low school maladjustment. Finally, we examined psychological intervention methods using the above findings.

研究分野：臨床心理学

キーワード：不適応　小学生　中学生　高校生　アセスメント　投影法　縦断的研究　横断的研究

１．研究開始当初の背景

近年学校では，いじめや不登校等，多くのメンタルヘルス問題を抱えている。本来ならば深刻な問題として表面化する前に，生徒の不適応徴候を察知し介入する等の予防的観点からのアプローチが重要である。しかしながら，小学生から高校生までを対象とする 1 次・2 次・3 次予防を包括したアセスメント方法はほとんどみられない。また，学校場面においては，スクールカウンセラーが教師と連携して，予防的活動を実施することが有効であると考えられる。そのため，スクールカウンセラー等が不適応に至るプロセスと関連した質問紙調査と投影法（描画法等）を実施し，生徒の不適応状態を多面的にアセスメントし，予防的介入を実践する方法について検討する必要がある。

２．研究の目的

本研究は，学校場面における小学生から高校生を対象とした 1 次・2 次・3 次予防に対応した多次元的アセスメント開発（質問紙法・投影法），及び包括的な予防的介入プログラムを開発・検証することを目的とした。本研究は 尺度研究，投影法研究，予防的介入研究の 3 つに分類される。 尺度研究としては，小学生，中学生，高校生を対象とした１次・２次・３次予防に対応すべく不適応に至るプロセスに焦点を当てた不適応感尺度の開発を行うことを目的とした。投影法研究では, S-HTP 法の各アイテムの描画面積及び SCT の記述内容と学校不適応との関連について検証した。 予防的介入研究としては，上記のアセスメントを生かした早期の段階で不適応を予防するための介入システムの提案を行うことを目的とした。

３．研究の方法

本研究は，学校場面における小学生から高校生を対象とした多次元的アセスメント開発及び 1 次・2 次・3 次予防を含めた包括的な予防的介入システムを開発することを目的とする。そのため，研究は尺度研究，投影法研究, 予防的介入研究の 3 つに分類される。

まず，尺度研究では小学・中学・高校版不適応プロセス尺度を作成し，信頼性・妥当性の検討を行った。特定された要支援生徒の不適応状態（登校状況等）や教諭評定も踏まえて妥当性についても検証を行った。

次に投影法研究では，photoshop を用いて S-HTP の描画面積について測定し，描画面積と不適応感尺度との関連について検討を行った。また，SCT 研究では，不適応感尺度を用いて不適応高群と低群に分け，群ごとに記述内容が異なるかについて kh-coder を用いて比較検討を行った。

最後に，予防的介入研究では，スクールカウンセラーが不適応感尺度と投影法（S-HTP 及び SCT）を用いて，コンサルテーションや心理面接に生かすための実践方法について検討を行った。

４．研究成果

（１）尺度研究

高校生のための不適応プロセス尺度を開発するために， 1417 名の高校生を対象に質問紙調査を実施した。探索的因子分析の結果，＜不適応徴候＞，＜被受容感の乏しさ＞，＜社会的コンピテンスの不足＞の 3 水準ごとに下位因子が抽出された。不適応にいたるプロセスとしては，＜社会的コンピテンスの不足＞が＜被受容感の乏しさ＞を媒介し，＜不適応徴候＞に影響を与えている過程が明らかとなった（図１）。2 年間の縦断的調査より学年差を検討したところ，1 年生から 2 年生で不適応徴候が有意に高まっていた。一方，2 年生から 3 年生では被受容感が増加し，社会的コンピテンスの向上と不適応徴候に影響を与えていることが示された。

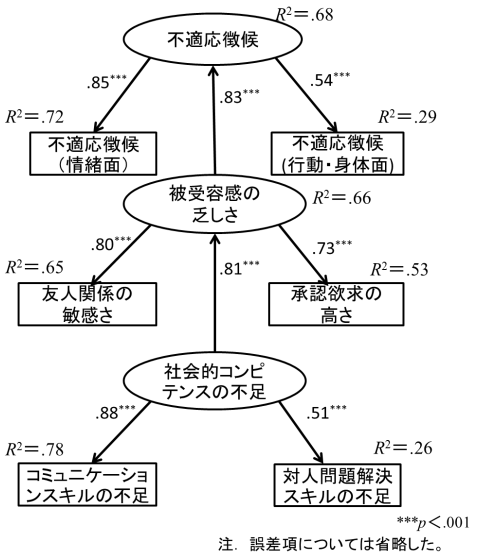

図1　学校不適応プロセスモデル（高校生）

X^2=52.22, df=7, p<.001, GFI=988, AGFI=.964, CFI=.983, NFI=.981, RMSEA=.068

また，小学生版学校不適応感尺度とスクールカウンセラー（以下，SC）への関心尺度を開発し，学校不適応感が SC への関心に与える影響過程及び各尺度の学年差について検討を行った。まず予備調査をもとに質問紙調査を作成し，本調査では小学 3 年生～6 年生 470 名を対象に質問紙調査を実施した。因子分析の結果，学校不適応感尺度では＜不適応徴候＞＜不適応要因＞の 2 水準において計４因子が SC への関心については 1 因子が抽出された。次に，学校不適応感が SC への関心に与える影響過程を検討したところ，＜不適応要因＞が＜不適応徴候＞を媒介して＜SC への関心＞に影響を与えていた。また，横断的調査と縦断的調査を用いて各尺度の学年差について検討を行った。その結果，SC への関心と不適応要因（友人関係問題）及び不適応徴候（情緒面）が小学 5 年生から 6 年生間で有意に低下していた。

（２）投影法研究

描画法のひとつである S-HTP 研究では，S-HTP と不登校傾向との関連についての検討を行った（表１）。その結果，女子生徒より男子生徒のほうが家の描画面積が大きかった。男子の方が女子より自我発達水準が低く，家族に精神的に依存している可能性が示唆された。　続いて，人の描画面積は遊び・非行に関連する不登校傾向と有意な負の相関関係が見られた。今後，人を小さく書いている生徒には，自信が得られる体験を積み重ねていくことで抑うつと自尊感情の低下を防ぐことができ，その結果非行行動も抑制する可能性が推察された。木の描画面積は，別室登校を希望する不登校傾向と負の有意な相関関係，社会的コンピテンスとは正の相関関係が見られた。これらの結果より，木を小さく描く生徒は社会的コンピテンスが低く，別室登校傾向が高い状態であることが推察される。

表１ S-HTP の描画面積と学校不適応関連尺度との相関

尺度名	1	2	3	4	5	6
1. 家						
2. 木	−.11					
3. 人	.02	.22*				
4. 別室登校を希望する不登校傾向	−.14	−.23**	.03			
5. 遊び・非行に関連する不登校傾向	−.05	.11	−.20*	.37***		
6. 精神・身体症状を伴う不登校傾向	−.12	−.08	.01	.66***	.32***	
7. 社会的コンピテンス	.04	.23**	.16†	−.44***	−.04	−.30*

†$p<.10$. *$p<.05$. **$p<.01$. ***$p<.05$.

SCT 研究では，不適応高群と低群間で教師とスクールカウンセラー（以下，SC）に関するイメージの構成要素が異なるかについて検討を行うことを目的とした。その結果，不適応高群は低群に比べて，“先生”について「怖い」と記述している児童が多いことが明らかになった。また，SC については，高群は低群より「相談」の中心性が高いとともに，「会ったことはない」「話してみたい」とのつながりが見られ，SC に対する相談希望を示唆する内容が認められた（図２）。

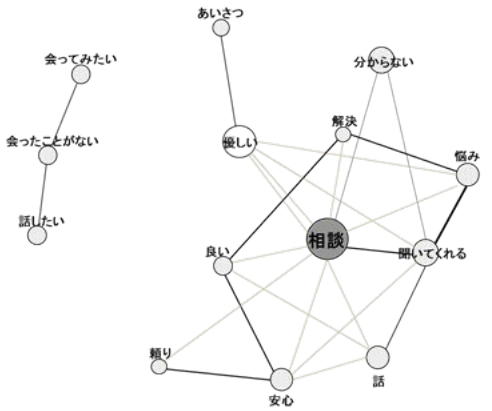

図２　不適応高群における SC の記述に関する共起ネットワーク図

そのため，不適応傾向が高い児童は，先生は怖いというイメージを持っている一方，SC には相談できるイメージを持ち，会ったことはないけど話してみたいと期待を持っていることが明らかとなった。上記の内容を記入した児童には，SC が先生と連携をして支持的な環境を作ると同時に，相談できる体制を整えていくことの重要性が示唆された。

（３）予防的研究

本研究では，小学校において小学生版不適応感尺度及び SCT を実施し，フィードバック方法と効果について検証を行うことを目的として，A 小学校(全校児童約 600 人)の小学3年生から小学6年生までを調査対象とした。調査時期は，X 年 6 月(以下 T1)，X+1 年 11 月(以下 T2)，X+2 年 11 月(以下 T3)の 3 回実施した。毎回の調査で 400 名程度が対象となった。T1 の 6 月にメンタルヘルス調査（不適応感尺度，SCT）を行うことで，人間関係の躓きから生じる児童達の SOS を察知し，SC が教員と連携して要支援生徒を支援することが可能となった。T2，T3 では，11 月にメンタルヘルス調査を実施し，これまでの様子と照らし合わせる中で，児童の様子をふりかえる機会となり，次年度の学級編成の参考になったとの意見が聞かれた。また，SC が先生にメンタルヘルス調査の結果をフィードバックするなかで，以前から気になっていた児童がリスク有り群に入っていたとの意見もある一方，学級委員や一見まじめに見える児童のなかにも不適応要因を抱えていることに気づく機会となったとの報告もみられた。一方，児童へのフィードバックについては，フィードバックを希望する児童にメンタルヘルス調査の結果を伝えることで，SC と話すことができる機会となり，相談室の広報の一助となることが示された。このように SC が縦断的にメンタルヘルス調査を実施することにより．児童，生徒の継続的な変化についても把握することができるとともに，リスクを抱えたときに児童，生徒が自ら相談することにつながる可能性が示唆された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 12 件）

① Daiki Kato, Mikie Suzuki (2018). Rolefulness: Social and Internal Sense of Role Satisfaction. Education, 138(3) 257-263. 査読有.
http://www.ingentaconnect.com/contentone/prin/ed/2018/00000138/00000003/art00006#trendmd-suggestions

② 鈴木 美樹江 (2017). 高校生における不適応徴候と不登校傾向および登校状況との関連．人間と環境，8，29-36．https://ci.nii.ac.jp/naid/120006424247

③ Mikie Suzuki, Daiki Kato (2016). Expressed area of synthetic HTP test

and school maladjustment in Japanese early adolescents. Asia Pacific Journal of Counselling and Psychotherapy, 7 ,3-14. 査読有.
https://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/21507686.2016.1199440

④ Daiki Kato, Mikie Suzuki (2016). Personality Traits and the Expression Area of Synthetic House-Tree-Person Drawings in Early Adolescent Japanese. Psychological Thought, 9(1), 67-74. 査読有.
https://psyct.psychopen.eu/article/view/164/html

⑤ 加藤 大樹, 鈴木 美樹江 (2016). 中学生の統合型 HTP 法における人物表現の関連性. 金城学院大学論集 人文科学編, 12(2), 14-19.
https://ci.nii.ac.jp/naid/40020974226

⑥ 鈴木 美樹江, 加藤 大樹 (2016).リスク要因に着目した学校不適応に関する研究の動向. 金城学院大学論集 人文科学編, 12(2), 121-129.
https://ci.nii.ac.jp/naid/120005952818/en

⑦ Daiki Kato, Mikie Suzuki (2016). Developing a Scale to Measure Total Impression of Synthetic House-tree-person Drawings. Social Behavior and Personality, 44(1), 19-28. 査読有.
http://www.ingentaconnect.com/content/sbp/sbp/2016/00000044/00000001/art00003

⑧ 鈴木 美樹江 (2015). 中学生の不登校傾向と社会的コンピテンスとの関連 : 悩み状況と相談者の有無の視点も踏まえて 小児保健研究, 74(2), 267-272. 査読有.
https://ci.nii.ac.jp/naid/40020418109

⑨ 加藤 大樹, 鈴木 美樹江 (2015). 教育現場における描画テストの活用に関する研究の動向, 金城学院大学論集 人文科学編, 11(2), 32-39.
https://ci.nii.ac.jp/naid/120005952818/en

⑩ Daiki Kato, Mikie Suzuki (2015). Relationships between human figures drawn by Japanese early adolescents: Applying the synthetic House-Tree-Person test. Social Behavior and Personality, 43(1), 175-176. 査読有.
http://dx.doi.org/10.2224/sbp.2015.43.1.175

⑪ 鈴木 美樹江, 森田 智美 (2015). 不適応に至るまでのプロセスに着目した高校生版学校不適応感尺度開発. 心理臨床学研究, 32(6), 711-715. 査読有.
https://ci.nii.ac.jp/naid/40020408665

⑫ 鈴木 美樹江 (2014). 中学生の視点取得が自尊感情に及ぼす影響. 学校メンタルヘル, 17(1), 73-77. 査読有.
https://ci.nii.ac.jp/naid/40020352049

〔学会発表〕（計 23 件）

① 鈴木　美樹江, 加藤大樹 (2017). 高校生の学校不適応感と役割充足感に関する研究 ―役割充足感が学校不適応感に与える影響―. 日本教育心理学会第 59 回総会.

② 谷口由香莉, 肥田幸子, 鈴木美樹江, 大塚敬子, 馬場ひとみ (2017). 学校適応に関する SCT(Sentence Completion Test) 研究（5）－通学班について学年と性別から見えたもの－. 日本心理臨床学会第36回大会.

③ 肥田幸子, 谷口由香莉, 鈴木美樹江, 馬場ひとみ, 大塚敬子 (2017). 学校適応に関する SCT(Sentence Completion Test) 研究（6）－クラスの友だちについて学年と性別から見えたもの－. 日本心理臨床学会第 36 回大会.

④ 大塚敬子, 鈴木美樹江, 馬場ひとみ, 谷口由香莉, 肥田幸子 (2017). 小学生における不適応プロセスに関する研究（6）－3 年間の縦断的調査による学年差の比較検討－. 日本心理臨床学会第 36 回大会.

⑤ 馬場ひとみ, 鈴木美樹江, 大塚敬子, 肥田幸子, 谷口由香莉 (2017). 小学生における不適応プロセスに関する研究（８）－3 年間の縦断的調査からみた学校不適応感が欠席日数に与える影響－. 日本心理臨床学会第 36 回大会.

⑥ 鈴木美樹江, 大塚敬子, 馬場ひとみ, 谷口由香莉, 肥田幸子 (2017). 小学生の不適応プロセスに関する研究（7）－3 年間の縦断的調査からみた学校不適応感と欠席日数との関連－. 日本心理臨床学会第 36 回大会.

⑦ 馬場ひとみ, 鈴木美樹江(2016).高校生における不適応プロセスに関する研究−縦断的調査による学年差の検討−. 日本学校心理学会第 18 回大会.

⑧ 大塚敬子, 鈴木美樹江(2016).小学生における不適応プロセスに関する研究−フィードバックとスクールカウンセラーの活動を中心に−. 日本心理臨床学会第 34 回大会.

⑨ 谷口由香莉, 向井麻美子, 山内貴恵, 大塚敬子, 鈴木美樹江(2016). 学校適応に関する SCT(Sentence Completion Test) 研究（１）−クラブ（部活）・通学班・クラスの友達におけるイメージについて−. 日本心理臨床学会第 34 回大会.

⑩ 廣浦美穂, 山脇麻由美, 谷口由香莉, 向井麻美子, 馬場ひとみ, 鈴木美樹江(2016). 学校適応に関する SCT(Sentence Completion Test)研究（2）−スクールカウンセラーと先生のイメージの差異について−. 日本心理臨床学会第 34 回大会.

⑪ 山内貴恵, 肥田幸子, 谷口由香莉, 向井

麻美子，鈴木美樹江(2016)．学校適応に関する SCT(Sentence Completion Test)研究(3)−学校不適応傾向とクラスの友達及び通学班の関連−．日本心理臨床学会第 34 回大会．

⑫ 鈴木美樹江，馬場ひとみ，肥田幸子，廣浦美穂，山脇麻由美，大塚敬子(2016)．学校適応に関する SCT(Sentence Completion Test)研究（4）−学校不適応傾向とスクールカウンセラー及び教師イメージとの関連−．日本心理臨床学会第 34 回大会．

⑬ Daiki Kato, Mikie Suzuki (2016). Developing a scale to measure total impression of synthetic House-Tree-Person Drawings. The31st International Congress of Psychology.

⑭ Mikie Suzuki, Daiki Kato (2016). Expressed area of synthetic HTP test and school maladjustment in Japanese early adolescents. The31st International Congress of Psychology.

⑮ 廣浦美穂，鈴木美樹江，大塚敬子，向井麻美子，肥田幸子(2015).小学生における不適応プロセスに関する研究（１）−横断的調査による学年差・性差の検討−．日本心理臨床学会第 34 回大会．

⑯ 大塚敬子，鈴木美樹江，山内貴恵，廣浦美穂，向井麻美，肥田幸子(2015).小学生における不適応プロセスに関する研究（2）−縦断的調査による学年差の検討−．日本心理臨床学会第 35 回大会．

⑰ 向井麻美子，鈴木美樹江，大塚敬子，山内貴恵，廣浦美穂，肥田幸子(2015)．小学生における不適応プロセスに関する研究(３)− 縦断的調査による不適応プロセス尺度間の関連 −．日本心理臨床学会第 36 回大会．

⑱ 鈴木美樹江，大塚敬子，向井麻美子，廣浦美穂，山内貴恵，肥田幸子(2015)．小学生における不適応プロセスに関する研究（4）−交差遅延効果モデルを用いた影響関係の検討−．日本心理臨床学会第 37 回大会．

⑲ 山内貴恵，鈴木美樹江，肥田幸子，大塚敬子，向井麻美子，廣浦美穂(2015)．小学生における不適応プロセスに関する研究(5)−学校不適応プロセスと不登校傾向との関連−．日本心理臨床学会第 38 回大会．

⑳ Mikie Suzuki (2015). Influence of ability to face and social support on self-esteem in middle school students. 29th conference of The European Health Psychology Society.

㉑ 鈴木美樹江，大塚敬子，向井麻美子，廣浦美穂，肥田幸子(2014)．小学生版学校不適応プロセス尺度作成の試み（3）‐不適応要因からスクールカウンセラーに関心を持つまでのプロセス検証‐．日本心理臨床学会?第 33 回大会．

㉒ 廣浦美穂，大塚敬子，鈴木美樹江，向井麻美子(2014)．小学生版学校不適応プロセス尺度作成の試み（2）−項目構成と妥当性の検討−．日本心理臨床学会第 33 回大会．

㉓ 向井麻美子 鈴木美樹江，大塚敬子，廣浦美穂，牧野真由子(2014)．小学生版学校不適応プロセス尺度作成の試み(1)−予備調査を通しての項目選択−．日本心理臨床学会?第 33 回大会．

〔図書〕（計 2 件）

① Daiki Kato, Mikie Suzuki(2017)．Advances in Psychology Research. Nova Science Pub Inc. pp53-79. ISBN:1536108340.

② 鈴木美樹江 (2016)．中学生の不適応に至るまでのプロセスと支援方法．愛知東邦大学地域創造研究所編．子どもの心に寄り添う：今を生きる子どもたちの理解と支援．唯学書房．pp33-46ISBN :9784908407055

６．研究組織

(1)研究代表者

鈴木　美樹江（Suzuki, Mikie）

人間環境大学・人間環境学部・講師

研究者番号：20536081